
The Number Of Angel

迷音ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Number Of Angel

【Nコード】

N9809S

【作者名】

迷音ユウ

【あらすじ】

20XX年。世界のあらゆるものは数字として処理される時代。

人々は、数字だけを信じ、数字によって動き、数字によって生きていた。あさがみはじめ浅上一も、そんな日常を生きる普通の高校生。しかし、あ

るひ、一人の少女と出会う。名前は夕波？ 織。彼女は、この世界に反抗するものたちのグループ「反抗の意志」のメンバーだった。彼女らの「反抗」という行為に惹かれ、一は、反抗の意志に入ることにする。個性的な面々の反抗の意志。

だんだんと見えてくるこの世界のシステムの秘密。

そのとき、 ” 天使 ” が覚醒する

アットノベルスからお引越し。
このサイトでは初投稿。

キャラクター紹介

キャラクター紹介

主人公

浅上 一 a s a g a m i h a j i m e

男

AGE:17

夕波 ? 織 y u n a m i r i o

女

AGE:17

「反抗の意志」のサブリーダー

青崎 玲渚 a o z a k i r e o

男

AGE:20

「反抗の意志」のリーダー

鳥遊 唯望 t a k a n a s h i y u m i

女

AGE:18

「反抗の意志」のメンバー。得意なことはクラッキング

佐渡島 樹椰 s a d o j i m a m i k i y a

男

AGE:19

「反抗の意志」のメンバー。よくさどがしまと名前を間違えられる。

沖ノ鳥 雪 okinotori yuki
女

AGE:16

「反抗の意志」のメンバー。エセ多重人格

桜島 烈 sakurajima retu

男

AGE:19

「反抗の意志」のメンバー。趣味は銃をいじること。

ブローグ

ブローグ

「オペレーション、開始します」

玲渚れおの静かな一声とともに、行動は開始された。狙うは、人工気象装置など、この国に必要なものを制御しているマザーコンピューター。もちろん、そんな、国の生命線のようなものには、そう簡単には近づけない。

桁数不明の暗証番号。指紋認証、静脈認証、網膜照合……。そして、弾丸をも通さない、鋼鉄の扉。

どうやってはいるかという、まあ、簡単なことだ。

『まずは、暗証番号解析からです。タッチパネル横のUSBポートから接続できます』

全員が耳につけているヘッドセットから、雪ゆきの声が聞こえてきた。
「唯望ゆみお願い」
「唯望りおお願い」

？ 織が唯望に対し、アイコンタクトで意思を疎通させる。

唯望はアイコンタクトを返すと、ハンドバックから小型のモバイルパソコンを取り出した。小型といっても、侮ることはできない。このパソコンは、スーパーコンピュータにも匹敵する、高スペックのオリジナルパソコン。唯望は、そんなパソコンを、USBケーブルで、暗証番号入力用のタッチパネルの横のUSBポートにつなぐ。

「私、自動でクラッキングしたり、それを補助したりするソフト嫌いなんだよね」

そんなことをつぶやきながら、超高速で、何かを打ち込んでいく。目にもとまらぬ早業とは、まさにこのことだろう。

カチカチ、ではなく、タタタタ、というあまり聞きなれないタイプ音が、反響する。

約一分。唯望が声を上げた。

「出たよ。すごいね。五十二桁もあるんだもん。驚いちゃった」

あくまで唯望はパスワードを調べただけで、ロックは解除していない。結局は手入力だ。

「んじゃ、読み上げるよ。覚えてね。樹椰
みきや

。準備オーケー？」

「ああ、オーケー」

樹椰が反応すると、唯望は数字の羅列を始めた。

「9 8 7 1 3 6 4 6 1 7 3 5 4 7 8 2 3 6・・・」

唯望はたんと読み上げる。

「8 7 6 5 1 6 0 9 4 8 1 8 6 3 2、で最後は0。覚えてよね」

樹椰は大丈夫、とうなづき、反唱し始めた。一文字の狂いもない。何の法則性もない、五十二の数字を、樹椰はたった一度聞いただけで覚えた。

樹椰はタッチパネルに触れ、一文字一文字正確に、しかし高速でタイプしていく。

ピーッ

U N L O C K E D

「開いた。行くよ」

いつの間にか？織が先頭に立っていた。？織に続き、扉を抜ける。

一はふと、扉の上を見た。

「監視カメラがあるけど、どうする？」

「いまさら、どうつてことないっしょ。あくまでこれは”反抗”なんだから・・・。まあ、一応壊しときますか」

言つと玲渚は、腰からリボルバーを引き抜いた。そして、監視カメラめがけて引き金を引いた。バギンという音とともに、監視カメラ

ラは砕け散る。それと同時に、あたりにはビービーという警告音が鳴り響く。

『唯望さん。パスの変更をお願いします』

「了解」

唯望は扉の裏側のUSBポートから再び接続した。クラッキングし、今度はパスワードを変更する。

「よし、オーケー。今度は一秒ごとにパスワードを変更するプログラムをかませておいたから」

五人は再び走り出す。四十メートルほど走ったところにまた扉があった。

「今度は何だ!？」

『おそらく、指紋認証、網膜照合、静脈認証、声紋認証の複合認証のようです。ここは強行突破しましょう』

「ラジャ」

五人とも、それぞれの銃火器を構える。

「ファイア!!」

爆音とともに、大量の弾丸が射出される。使用しているのは主にマシンガンやサブマシンガン。すべてが改造済みの品だ。

「どう?」

残弾がなくなったところで、?織は確認を取った。しかし、辺りは白煙に包まれ、見通しが利かない。

「見えないな・・・」

樹椰は手で必死に煙をかき分ける。

数秒後、煙が消えた。目の前の扉は、破壊されていた。

「さすが、烈の銃はすげえな。銃弾も特製なんだろ?」

『だろ?そう言ってもらえとうれしいな。作ったかいがあるってもんだ』

ヘッドセットの向こうから、烈がうれしそうにしているのが伝わってくる。

ちょうどそのとき、?織は何かに気づいた。

「（みんな、静かにして。すぐに、パターンGに移行できるように構えておいて）」

全員が息を呑む。

パターンG・・・。

タツタツタツ、と前方から人が走ってくる音が聞こえた。一人ではない。数十人もの。

『みなさん！大変です！誰もいないはずだった、MC』
マザーコンピューター

方面から、警察機動隊が迫ってます！！』

？ 織と玲渚は声を張り上げた。

「みんな！速やかに、パターンGへ移行して！」

「冷静に！冷静に動けば対処できるぞ！」

パターンGだけは今回使うはずではなかった。

なぜならば、すでに、情報として、MC側には、誰も人はいないということがわかっていたからだ。そして、MCまでは今通つてきた一本道でしかたどり着けない。ゆえに、いま前から機動隊が来たってことは、行動が先読みされていた！？

一はそんなことを考えながら、パターンGの行動に移った。

一ヶ月前、僕はまるで生きている実感がなかった。ただ、機械的に毎日を過ごすだけ。たまにある刺激といえ、最近頻発するようになった自殺の報道。殺傷事件の報道。

でも、「彼女」と出会ってから、僕の生活は一変した。

初めて、自分の意思で反抗できるようになった。

プロローグ（終）

第一話 ？

第一話

ピピッ。午前、七時です。起床の才時間です。
ピピッ。午前・・・、ピッ。

あさがはじめ
浅上ーは、携帯のアラームを止めると、ベッドから出た。

眠い。ーはベッドの横にある小さな赤色のスイッチを押した。すると、部屋の天井にある、小さなノズルから、霧が噴出す。これは覚醒剤だ。眠気覚ましの薬のようなもの。

そんなものに、偽造の爽快感を得ると、クローゼットを開け、私服を取り出す。

ーは、何の特徴もない市内の私立高校に通う高校二年生だ。さつと私服に着替えると、思い出したように、ベッドの上に転がっていた携帯を拾い上げた。それは五十年前の人が見ると、確かにただの携帯だ。しかし携帯といっても、これには、昔より重要さがさらに増している。

住民ナンバー、銀行口座、学生証、免許証、電子マネー・・・。人々の間では、まさにそれは命より大切なものである。単に、人と話したり、メールのやり取りをしたりするものではなかった。電子マネーにいたっては、世界中で貨幣、紙幣が廃止されてからは、これがないと買い物ができない。

ーは、そんな命より大切なものをポケットに入れ、自分の部屋がある二階から、ダイニングのある一階へと向かった。ーの家はこの時代では非常に珍しい一戸建てだ。日本の家屋の役60%はビル、アパート、マンション化しているこの時代において、とても貴重な家。と、いうのも、二十年ほど前に政府の方針で、マンション化が推し進められ、財産のない住民は、ほぼ強制的に追い出された。ー

の祖父は当時、大手自動車メーカーの会長で、なんとか、この家を残すことができた。それでもこの大きさ　二階建てが限界だった。ダイニングのイスに座ると、一はテレビのスイッチをつけた。リモコンはない。思考で操作する。テレビでは、ちょうど、天気情報があつていた。天気予報ではなく、天気情報。一が住んでいるこの東京では試験的に、人工気象装置が使われ、天気が操作されている。一が生まれた年と同じ、ちょうど17年前に始められた試験。期限は二十年。あと三年だ。

何もかもが人工的だ。

一がいま食べている食事さえも、計算しつくされ、十七歳の麻上一の成長に、もっともふさわしい食事となっている。

でも、一はそのことに、何も思わない。なにせ、ものごとこついたときからの習慣だから。

ピピーツ。午前、七時四十五分デス。ソロそ口家をデルお時間です。

そんな音に促され、家を出た。

車庫にしまつてある自転車にまたがり、一は高校に向かった。

第一話 ？

―は昇降口で学生証（と、言っても携帯の中に電子化されているものだが）を提示し、中へ入った。無機質な白い壁。窓にはめこまれているのはガラスではなく強化プラスチック。今はどの学校でもこんな感じだ。

五階の一番端の教室が、一のクラスだ。ガラ、と扉を開け、入った教室は小さな個室。この学校の生徒は全学年で約九百人だが、その約三分の一に当たる三百五十人が個室の教室だ。ゆえにこの学校はマンションに似た作りになっている。

個室といってもそんなに狭くはない。部屋の中央にはパソコンが埋め込んである机とイスがある。窓の側には、畳一枚ほどの広さのカーペットが敷かれている。

なぜ、個室かというと、政府がこちらの方が授業効率がいいといい、推薦という名の強制をしているからだ。以前の大人数での授業はそういう理由でなくなった……らしい。もっとも、一が学校に行き始めた頃には既にそうだった。

―は、イスに座ると机の上に置かれていたヘッドセットを頭につけ、机ノートパソコンの電源をつけた。本当に、学校で使うノートパソコンの”ノート”の意味は薄型の持ち運びができる、ではなく読んでそのまま、あの紙のノートに等しい。目が悪くならない特殊加工のディスプレイに羅列される数式。ヘッドホンから聞こえてくる合成音声。人間の肉声に限り無く近付けられた、しかしどこか無機質さを帯びているそれは、十七年間聞き続けて来た今でも、一になんともいえない違和感を与え続けている。

十分ほど公式などの説明があったところで練習問題が表示された。―はタッチペンをあやつり、解答する。こんな日常的な練習問題だって気が抜けない。この学校はたかが小問でも、すべてが成績資料として数値化され、学校の成績サーバーと国の成績処理施設に転送

される。一はそんな問題を全問正解でやり過ごす。

内心、ほっとする。何もかもが細かく数値化された成績では、たった一問のミスでも響いてくる。高校、大学入試が廃止され、成績だけで自動振り分けになってから、もうすぐ二十年が経とうとしているらしい。受験がないという点では安心できるが、それは同時に毎日が気を抜けないということを意味する。

なんだか、様々な重圧が見えないところから迫ってきているようだった。それに耐えられないものも少なくはない。事実、学生の自殺者は毎年毎年増えている。そういえば、昨日もこの学校の生徒が自殺したらしい。

自殺した生徒はほとんどが”人間らしい”生活をしようとした人ばかりだった。だから、この世界の在り方に耐えられなくなったのだ。一も生まれた時から既にこんな世界だったとはいえ、やはり住みやすくはあるが、在りにくい世界と感じていた。だから、この十七年間でこの世界に適用する方法を見つけ出した。それは、機械のように生きること。ただ、数字しか扱えない、コンピュータのように生きること。そうしなければ、この世界に在り続けることは難しい。……ただ、たまに自問自答してしまうことがある。これでいいのか、と。

時間にナリマシた。一時間目ヲ終了します。

そんな音に指示されるなんて、ほんと、馬鹿みたいだ　なぜか
今日はそう思えた。

第一話？

一は大きく背のびをした。いくら目は、特殊加工の画面の所為で疲れないとはいえ、からだはガチガチになる。そろそろ、十三時。今から一時間昼休みだ。

一は食堂に向かうべく、教室を出た。さすがに昼休みともなると、廊下もにぎわう。

六階にある食堂に行くまで、そんな人ごみの中を掻き分け、進む。食堂は、すでにこったがえしていた。

一は、ラーメンの食券を買い、それをカウンターの機械に滑り込ませた。多少の機械音がした後、数秒で、機械横の小さな正方形のガラス扉が開いた。一はそこにあるラーメンを取ると、トレイの上に乗せ、食堂内を見渡す。食堂は満席の盛況ぶりで、座る場所がなかった。

ため息をつきながら、席が空くのを待つ。

そう時間もたたないうちに、校庭側の、窓に近い席が空いたので、そこに座った。ただ、一人で。ほかを見ると、比較的友達と話している人が多い。それが、ここでできた友達なのか、中学からの友達か、なんてそんなことは知らない。一は、この学校に友達がいなかった。友達ができなかった。いや、つくらなかった。

もともと、この高校には、親友であつたやつと、一緒に行こうと約束をしていた。

この学校に行くための必要な「成績ポイント」は、2800。一はこの学校に、2813で入った。その親友は、2799で落ちた。たったの一ポイントで。

一は携帯を開いた。そして唯一の親友 五夜隼人いつつやはとへメールを送った。いま、なにしてる？といった内容の普通のメール。

一分とも経たない時間ののちに、返信はきた。

「……………なんだ、こりゃ」

つい、そんなことを呟いてしまった。しかし、このメールを見たら、誰でもそう呟いてしまっただろう。なぜなら、メールの本文に書かれていたのは、意味の分からぬ数字の羅列だったからだ。

文字化けでもしたのだろうか……。と、一は思った。文字化けとは、インターネットのウェブサイトなどで、文字の「コード」が違ったり、通信の際に何かミスが起き、文字が違う文字に置き換わってしまうものだ。よく見る文字化けとしては、見慣れない漢字や、「・」などだが、こんな、数字が羅列される文字化けなど見たことない。

そんなことを考え込んでいる間にまた、隼人からメールがきたが、同じように、数字が羅列されているだけの内容だった。

今日は通信の状況が悪いのだろう。一はそう結論付けて、ラーメンにありついた。

ふと、食堂内がざわついた。もともと、ざわついていたが、それとは違ったざわめき。顔をあげ、まわりを見ると、多くの生徒が窓から外を見ていた。

「なんだ、あれ」

「おい、おい、やばくねえか」

「あれって、もしかして、テロ組織かな・・・？」

(テロ・・・？)

はじめはその言葉が気になり、食べるのをやめ、窓から外を見た。そこから見える、正門から入ってすぐの広場には、四人の人影があった。彼ら（もしくは彼女ら）は、それぞれがフードを被り、その所為で顔が見えず、年齢や、性別は分からない。

また、彼らは全員が、武器を持っていた。一人は、ライフルのよきなもの。一人は、両手にハンドガンをはたまた、長い刀を持っている奴もいると思えば、背中に口ケットランチャーらしきものを

背負っている奴もいた。

と、視界の上のほう、正門の向こう側のほうから、装甲車が突っ込んできた。警察機動隊だろうか。その車両は、以前テレビの報道で見たことがあった。

それに気付いたのか、四人はそれぞれ散った。そのうち二人は、校舎のほうへ入ったようだ。

追って、装甲車から、武装した機動隊員が次々と出てくる。

しかし、こんな状況でも、校内は異様なほど落ち着いていた。

こんなこと、「日常茶飯事」だから、驚くことでもない。

生徒はそれぞれ、校内放送の指示に従い、各自の教室に戻っている。

そんな中、一は、なぜか教室に戻る気が起きなかった。なので、ラーメンをゆつくりと食べていた。誰もいなくなつた、静かな食堂の中、一人で。

自分呼び出す、校内放送が続いていたが、無視することにした。たまにはこういうのも悪くない。

それにしても、今日はなんだか、いつもと気分が違った。気持ちが高ぶっているというか……。どうもいつもより反抗したい気持ちが押えきれない。そういえば、朝からそんな感じだった。それが、今のテロ組織の登場で、さらに勢いが増したようだった。

テロ組織……。

昔で言つと、それは悪でしかなかったかもしれない。

ただ、今は違うような気もする。

彼らは本当に、社会に対し、反抗しているのだ。

一にとってそれは羨ましい存在だった。

自分から反抗するということ。

今の人間はそれができなくなりつつある。

いや、できなくさせられているのか。

政府……。世界の方針によって、反抗は抑制され、徹底的に排除されていく。

それは、子供の教育からして、すでに始まっているのだ。

人間は集まると、反抗したくなる。だから、授業も個別になったのだろう。

しかし、そういったことが更なる反抗心をうみ、結局テロが起きる。また、そういったことがこころの苦痛となり、自ら命を絶つものが増える。結局は、身から出た錆なのだ。

そんなことを思っていると、自然に笑いがこぼれた。

「一人で笑うなんて……いよいよ、俺おかしいな……」

そんな、自嘲染みたことを言いながら、ラーメンのスープを飲みきった。

ちょうどその時。

ドゴン！と、食堂の入り口付近で爆発が起きた。

白煙が上がる。

一は、目を白黒させながら一步身をひいた。そして、爆発のしたほうを凝視する。

サア、と白煙は空気に溶けていく。その中から人影が現れる。フードを被った……。さっきのテロ組織。そいつは、碎けた扉をまたぎ、食堂の中へ入ると、乱雑にフードを取った。中から、きれいな長い髪があらわれた。瞳が大きく、整った顔の少女。年齢は、自分と同じくらいだろうか……。

彼女は、”片手”にもっていた、ロケットランチャーを地に落とすと、その場に倒れた。

「お、おい！なんだって……いうんだよ」

一は、駆け寄り、少女を抱き上げる。背中に手を回したときに、なにかべとつとしたものが手についた。ちょうどその部分だけ、感触が違う。生肉を触るような……。

思考が回るのが遅かった。

はっと気付き、腕をひく。手についていたのは 血。一は彼女の背中を見た。背中に穿たれた二つの孔。ちょうど、左右の肩甲骨辺りにあいている。銃痕にも見えるそれからは、どくどくと脈打つように血が流れ出していた。

一瞬、一は吐きそうになったが、必死に吐き気を押さえ込む。

「くっそう。どうすれば……」

ゆうなみ
「夕波!!」

どうしようもなく、戸惑っていると、叫び声が聞こえた。一は声のした方向を向く。そこにいたのは、一人の男。二十歳ぐらいだろうか。フードを被っていたところを見ると、どうやらテロ組織の一員らしい。

彼は、そう叫んで、一の元へ……いや少女のもとへ駆け寄った。一は、反射的に、少女を彼に手放す。

「くっ。出血がひどいな。早く止血しないと……おい、おまえ。ちよつといいか」

「え、俺ですか？」

「おまえ以外に誰がいるって言うんだ。俺の腰のポーチから、小さなビンを取り出してくれ。緑色の透明な液体が入っている奴だ」

一は一瞬と惑ったが、この男が彼女の仲間みたいなので、従うことにした。ポーチの中にはいろいろはいつていたが、そのビンはすぐに見つかった。

「それを開けて、中身を傷口にかけてくれ」

「……これは？」

「特殊なクスリだ。それ以上は企業秘密だ」

「……」

一は小ビンを開け、中の緑の液体を、少女の傷口にたらす。傷口に液体が触れた瞬間少女の体が少し、痙攣した。一はびくつとなり、

男の顔を窺う。男は、「大丈夫。早くやれ」と小さく言った。

「全部かけてしまつていい」

男のいう通り、ビンの中身を全て、かけた。すると、不思議なことにすぐ、血は止まつた。

「何を思う？」

「・・・・・・へ？」

いきなり男はわけのわからないことを訊いてきた。何を思う、とは一体どういうことだろうか。いまのクスリのことだろうか・・・・。

一が考え込むと、男は「いや、なんでもない」と首を振った。

「ちよつと頼みがあるんだが」

「あ、えーと。なんですか？」

「ああ、こいつを運ぶのを手伝つて欲しい」

「え、ああ・・・・・・。はい」

特に断る理由もなかったのでそうすることにした。いくら彼が男とはいえ、一人で長距離運ぶのは辛いだろう。テロ組織に手を貸す、というのもなんか複雑な気持ちだったが、少女がとても重態そうだったのでその気持ちは押さえ込んだ。

「運ぶのは、俺一人で何とかする。おまえは俺の指示に従つて・・・・・・、そうだな・・・・・・。このポーチの中身を使つてくれ」

男は腰に巻きつけていたウェストポーチをはずし、一に手渡した。そして、男は、少女をおんぶし、立ち上がった。

そのときに、下の階が騒がしくなってきた。たくさんの足音が聞こえる。

「く、もうきやがったか。おい、お前。そのポーチの中に、小さな六角形のものが入ってるから取り出せ。早く」

「はい！」

一はさつと、ポーチの中を探る。あつた。六角形で銀色をしている薄い板のようなもの。真ん中には赤いLEDライトがついており、そのそばには、小さなボタンが六つ取り囲むように並んでいた。

「えーと。ちよつとこの下辺りか。そこだ。その、お前の後ろの机

から右に四つ後ろに三つの机辺りの床にそれを置け。おいたら、
・・・そうだな、ボタンを三つ押してすぐこっちへ戻って来い。
軽く頷き、一はその板のようなものをセットする。ボタンを押し、
急いで戻る。

何が起きるのだろう、と眺めていると。

バゴンと言うつまじい音とともに爆発が起きた。

「ゴホッ。なんですか・・・いまの」

「見ての通り、爆弾だが？」

平然と言われても困る。

爆弾はその爆発で、下、二つの階を貫通した。それにしても不思議な爆弾だ。下方向にしか爆発しないとは。

「さあ、行くぞ」

男は、少女をおぶさったまま、その爆発であいた穴に飛び込んだ。

「おい、まじかよ」

一は穴から下を覗き込む。男は二階下　四階に着地していた。
ものすごい運動神経だ。

男は早く来いと、手で促す。一は、半ばやけくそ気味に飛び降りた。何とか着地に成功はしたが、足がびりびりとしびれる。

「早く行くぞ」

人一人おぶさっているとは思えない速度で、男は走っていく。一はやっこの思いでついていく。

「ポーチからさっきと同じ奴を出してくれ。・・・ああそう
だ。やはり、さっきより少しでかめの奴で頼む」

一は走りながら、指示されたものを出す。

「これ、どうするんですか!？」

「ボタンを五つ押して前へ投げろ」

言われた通りに行動する。ボタンを押し、走りながら勢いよく投げた。ぶん、と飛んでいったその爆弾は、前方の床に落下し、それと同時にさっきより、大きな爆発が起きた。

今度は一階まで貫通していた。

「これ、飛ぶんですか・・・？」

「ああ、もちろんだ。お前が先にいけ。ほら」
どん、と体当たりをされた。

「わああああ」

体制を崩しながら、落ちていく。やばい、床に激突する、と思ったときにはすでに目を閉じていた。が、予想外なことが起きた。どすんと落ちるはずが、ぽふんと、なにやら柔らかいものの上に落ちた。

「え？」

目を開けてみると、どうやらマットの上のようだった。続いて、男も飛び降りる。

ブルルルル。という音が響いた。どうやらこれはトラックの荷台の上らしい。

ふと、後ろを見ると機動隊が、銃を放ってきた。

「うわっ！」

再び目を閉じる。が、ガキンという音が鳴り響いた。いつまにか、荷台のまわりにあらわれた装甲が、銃弾を弾いていた。装甲は、マジックミラーのようにこちらから向こうは見えた。

そのままトラックは、昇降口をぶち破って、校庭にでた。ものすごいスピードで校門を抜けようとする。もちろん校門は警察機動隊が封鎖をしていたが、そんなことお構いなしに、つつこむ。警察起動隊員は、軽い驚きの声をあげながら、よけた。校門を突破したトラックを後ろから銃で撃っていたが、もちろん装甲に阻まれ、意味はない。タイヤにも銃弾が当たっていたようだが、特殊加工が施されているらしく、こちらも意味はなかった。

「協力感謝する。えーと・・・。誰だ、お前」

誰だ、とはひどいが、名前を言っていないのじゃない。

「浅上」。浅いに上下の上。それに数字の一ではじめ」

彼は、なるほどと、頷いた。

「そうか、俺の名前は、青崎玲渚。あおさきれお『反抗の意志』のリーダーだ」

第一話？

「反抗の……意志……？」

「ああ、そうだ。俺たちのことをテロ組織だと思っているだろうが、こつちとしては、そういわれるのは快くない」

「そりゃあ、”今の時代”テロ組織といわれて嬉しいが、テロ組織はいないだろう。昔は知らないが。」

「俺たちはあくまで、世界に反抗をするための組織だ」

「それが、テロ組織だと思うのだと思う。しかし、一は口にはしなかった。」

「まあ、テロ組織だったら、お前は今ごろ殺されてるよ」
急に冷たい口調。

確かに、彼らは何もする気配はない。しかし、今はじめはテロリストもとい、反抗の意志のメンバーと一緒にいるのだ。

「でも、俺たちは何もしないよ」

「は、はあ……」

「帰りたいって言うなら返してやるし、それこそ帰ってから、俺たちのことを他人はなしでもらっても、別段問題はない」

「……」

「どうする？」

トラックががたんと揺れる。それにしてもものすごいスピードで走っている気がする。

一は目の前で寝ている（意識を失っている）少女を見た。

一は、目の前にいる玲渚^{れお}の顔を見た。

一は、自分の心に問い掛ける。

どうしたいのか、と。

急にトラックがブレーキをかけた。

「？」

「どうやら、着いたみたいだな。アジト・・・？本部・・・？」
ウィーンと音が鳴り、装甲がしまわれていく。玲渚は、トラックから飛び降りた。

「おい。担架もってこい！」

「はい。ちよつとまってー」

一も、ゆつくりとトラックから降りる。

「ここは・・・」

一は辺りを見回した。とても大きな、コンテナみたいなものの中だった。天井には粗末な蛍光灯が一つついていてるだけで、もちろんそんな小さなものが広いコンテナ全体を照らすこともできるはずがなく、暗い。辺りには、鉄材が乱雑に置かれている。

どこからか、二人のと同じぐらいの年であろう男が、担架を持つて走ってきた。

「ほいほい。誰かけがしたんだ・・・って、？織じゃん！どうしたんだよ、おい」

「ああ、あの背中への傷がな。ちよつと気を失ってるだけだ。止血はした多分問題はないだろう。ベッドにでも寝かせておいてくれ」

了解、というと、二人は少女　？織を担架に乗せ、またコンテナの奥に消えていった。

一は、さっきの玲渚の言い回しが少し気になった。「あの背中の傷がな」。あの傷は後ろから撃たれた傷かと思っていたが、どうも前からある傷らしい。

「一。まあせつかくここまで来てしまったんだ。お茶でも出すよ。ジュースもある」

「ああ、いえ。だいじょ・・・」
「いいから、こいよ」

満面の笑みで肩をぽんとたたかれた。一は苦笑いをしながら、頷いた。まあ、変なことはされないだろう。

こつちだ、と玲渚はどんどんコンテナの奥に歩いていく。コンテナの一番奥にはなぜか、玄関のような扉があった。玲渚はためらわ

ず、そこにあつたインターホンを押した。

最近は滅多に聞かなくなった、ピンポンという音が、コンテナ中に響く。ガチャ、という音が鳴り、誰かがでた。

『はい。どなた？』

若い・・・中学か、高校生ぐらいの女の子の声だった。

「俺だ。俺。そう俺だよ、俺おれ」

『オレオレ詐欺！？』

「へ、あ、いや。オレだってばあ・・・・・・・・。ごめん、遊びすぎた玲渚だよ」

『ああ、』

まじめに向こうからは、ホツとしたように、ふうと息を吐く音が聞こえた。それにしても、さっきからの玲渚の感じから言うと、そんなおもしろいことをするのは意外だった。いまさら、オレオレ詐欺とは・・・・・・・・。オレオレ詐欺なんて、最近の詐欺検出声紋システムのおかげで消え去った、過去の存在。

『開けますよー。一秒だけロックを解除しますからね。一秒以内に頑張つて開けてね』

「一秒。はやっ！」

一が叫んでいると、

『五、四、三、二、一、はい、ロック解除』

言うと同時に、玲渚はものすごい反射スピードで、ドアノブに手をかけまわした。バン、とドアを開け放ち、中へ入る。

「よし、行こう」

一も、閉まりかけたドアの隙間から中へ入った。後ろでドアが閉まり、鍵が勝手にかった。

入るとすぐそこには階段があつた。下へ、下へと続く階段。電気はついていないため、真っ暗だが、階段の一段一段に備え付けられた小さな緑色のライトが、足元だけを不気味に照らしている

「足元に気をつけてな」

カッンカッンと、無機質な音が暗闇を支配する。

それにしても、どこまで降りていくのだろうか。なかなか長い。軽く、ビル四階分ほど降りたところで、階段は終わっていた。

「ほら、ここだよ」

玲渚は、鋼鉄の引き戸を開ける。この先はどんなところなのだろうか。様々な場所を思い浮かべる。

ガラ、とドアを開けた先は……

「はぁ……」

どこの家庭にもある、普通の玄関だった。

入ってすぐの場所には、靴が何足か乱雑に置いてあり、その隅には傘立てが。一段上がったフローリングの床には一枚カーペットがしいてあり、その奥には廊下が続いていた。廊下の左右には、部屋がいくつもあり、一番奥にはなんだか、リビングらしい広い部屋が見えた。

どこをどう見ても、ただの家だった。

「ここが、あの、本部？ですか？」

「そうだが？どうかしたか？」

「いや……」

意表をつかれた感じだ。

玲渚が靴を脱いで、中に入ったので、一もそうした。

「この部屋で待っていてくれ」

そういつて、玲渚は玄関のすぐ横の部屋に一を案内した。

「は、はぁ……」

その部屋は中央に机があり、それをさむようにソファーがおかれていた。どうも客間のようだ。

玲渚は座っていいぞといったきり、扉を閉めどこかへ行った。

一は仕方なくソファーに座った。ふんわりとしたすわり心地のいいソファーだった。

「なん……なんだろ……」

辺りをきょろきょろと見回す。普通の個室。壁には普通に時計がかけてあり、普通にカレンダーがあり、なぜかアニメもののポスタ

ーも貼ってあった。

ーはすることもなく、おもいきりソファーにもたれかかった。

「ん……ん……ん？」

ふと、後ろに気配を感じた。ゆっくりと後ろを向いた。

一人の少女と目が合う。ポニーテールのその少女は見た目気弱そうな顔立ちだった。歳は十五ぐらいだろうか。

「だれ、君」

「だれ？あなた」

二人はほぼ同時に声を上げた。

「だれって、それはこっちのセリフ。だって、ここ私たちの家だもん。あなた、だれ？どうしてここにいるの？」

少女は、ギンとこちらを睨んできた。

「あ、いや。えーと。どうしてここにいて言われても……
・。まあ名前ぐらいならいってもい……」

「じゃあ、言って」

無駄に、反応が早い。最後までセリフを言わせて欲しい。

「浅上ーです。はい」

なぜか、自然と、改まった口調になってしまった。

「はじめ。かあ。うん。りょーかい。私の名前教えて欲しい？」

少女はにつこりと微笑みかけてくる。

「いや、別に……」

「教えてほしーでしょ？」

いやな笑み。そんなに言いたいなら自分から言えればいいじゃないか。とかおもっている、

「私の名前は沖ノ鳥雪^{おきのとりゆき}。まあ、親しみをこめてゆき様って呼んで勝手に言ってきた。しかも、ゆき様ってどこに親しみがあるのがまったく理解できない。

「ねえ、どこからきたのー？ねえねえねえねえ教えろよー」

なんだか、雪はくどくどいいながら、頬をひばってくる。

ちょうどそこで、部屋の扉が開き、玲渚が、なにやら器とカップのつたトレイをもって入ってきた。

「はあ、雪。おまえ、なんしてんだよ」

そういうと、雪の頭をトレイで、ごととたたいた。

「いったあ！なにすんだよ、レオ」

「おまえ、Bモードになつてんぞ」

わけのわからないことを言いながら、玲渚は、トレイをテーブルにおいた。雪は頭を押えながら、部屋から出て行った。部屋の外から転んだ音と悲鳴が聞こえたが、あえて無視した。

「コーヒー大丈夫だったかな？」

トレイの上には、コーヒーの入ったカップが二つと、ポテチの入った器があつた。

「あ、大丈夫です。ブラックじゃなければ」

「無論、大丈夫だ。俺はブラックは飲めない」

そついいながら、玲渚は対面のソファに腰をかけた。

「まあ、改めて言おう。ん？まだ言っていないか。どちらにせよ、ようこそ。『反抗の意志』の本部へ」

第一話？

「反抗の意志……それが、このて……」
のグループ名みたいな奴ですか？」

「ああ、そういうことになるな。まあ、正直名前は決まっていけないに近い。暫定的というか、正式名称ではない。しかし、その名前で呼んでもらってもかまわないよ」

「はあ……」

壁にかけられた、アナログ時計の針の音が耳につく。

「それで、どうおもった？」

「なにが……ですか？」

「俺たちのことだよ。俺たちがやったことも含めてな」

「どうって……その、『刺激的』ってことですかね……」

「」

「刺激的……か。なかなかいい表現だな」

玲渚は軽く笑った。

刺激的、というのはとりあえず第一印象だ。テレビで見る映像と、生で見る光景は違う。やはり、刺激の大きさが一番のちがいだろう。
「なんで、玲渚さんたちはこういう事をしているんですか？あ、別にしたらいけないとかじゃなくて、ただ率直に知りたいなあとおもっただけで……」

本当にこんな質問をして何になるだろうと思いましたが、すでに口から出てしまったのでしかたがない。

「何で……か。そのままの意味だよ。『反抗の意志』。俺たちはこの政府に……いや、世界に反抗するために、集まったんだ。みんな、同じとは言わないが、似通った目的をもっている。だから、反抗ができる。人は一人じゃ何もできない。わかるだろう？」

一は頷く。

「俺たちは、こんな世界を変えたいんだ。まあ、しかし、すぐにと

はいかないだろう。上のやつらは頭が固いからな。俺たちはいろいろと気付かせるために反抗する。し続ける」

目的のため。特に、聞く気は起きなかった。

いま、一の中にある感情はただ一つ。

彼ら、「反抗の意志」に対する、憧れにも似た感情。

一人じゃ、何もできない。だから、一は今まで反抗ができなかった。反抗したいという気持ちができなかった。でも、こころの底には、こんな世界はもういやだ、とおもっている自分がいた。

そのこころの底の自分を掘り起こすことは、自分ではできないことだ。

こころの底の何かを掘り起こせるのは、他人だけ。

今回の、ことでその何かは掘り出された。

いままで、いくらテレビでテロなどの報道があっても掘り出されなかったそれは、なぜか今回掘り起こされた。なぜか、なんてどうでもいい些細なことだ。

掘り起こされた今、気持ちに素直に向き合いたい。

「頼みがあるんですけど」

「なんだ？俺たちにできる範囲なら何でもするぞ？」

自分を変えたい。

「あの……………」

なぜか、さつきの少女、？織の顔が頭の中に浮かんた。なんでだろう。なぜ、？織のことがこんなにも気になるんだろう。話したこともないのに。

「俺を……………。俺も……………、反抗の意志に入ります」

入らせてください、と頼むのではなく、入りますという確固たる意志として、言葉はでた。

玲渚も少し驚いたような表情をした。

「はは．．．．．。おまえ、おもしろいな。本当に？警察に捕まったりするかもしれないぜ？死ぬかもしれない．．．．．。それでも？」

一はまっすぐした視線を、玲渚に向ける。

「はい」

玲渚は大きく頷いた。

「OK。了解した。『外部』からのメンバーは初だな。よろしく」
そう握手を求められたので、一は応じる。

「よろしく願います」

「ところで、さっそくだがお前寝泊りはどうする？ここにもまだ部屋が、三個ほど空いてるが．．．．．。もちろん、家にいて、必要な時だけ呼び出す感じでもいいぞ？」

「ああ．．．．．」

一瞬、家のことが頭に浮かんだ、が別にそんなことどうでもよかった。

「ここで寝泊りします。どうせ、家には”だれもいない”し、問題はありません」

「そっか。わかった。よし。じゃあ、みんなを紹介しなくっちゃなリビング行くぞ」

「は、はい」

玲渚はソファーからたつと、扉を開け、廊下の突き当たりの部屋に向かった。一もついていく。

それにしても、すんなりと承諾された。予想外だった。もうすこし、こう、詮索されるとおもっていたが．．．．．ここにきてから意外なことが多すぎる気がする。

リビングはなかなか広かった。入ってすぐ、真正面には、有機E

Ｌパネルの超がつくほど大型のテレビ画面。そしてその前にはソファーが置かれていた。リビングの右の壁のほうには、本棚が配置され、マンガ本や小説等が置かれていた。左はそのまま、ダイニングキッチンへとつながっていた。

やはり、どう見てもただの一般家庭だ。

ふと、玲渚はポケットから通信機らしきものを取り出した。電源を入れ、口の近くへもっていき話す。

「ああ。聞こえるか？」

同時に、校内放送のように、天井のスピーカーから声が響き渡った。おそらくほかの部屋でもなっているのだろう。

「新規メンバーだ。みんなで自己紹介しあいたいとおもう。リビングにあつまってくれ」

通信機をしまうと、玲渚はソファーに座った。

すると、どたどたと走ってくる音が聞こえた。

「やつほ」

最初に入ってきたのは背の小さい女の子だった。まあ小さいといっても身長百四十センチメートルぐらい。ツインテールの髪型が印象的だった。

「こんにちわ。新入りさん。私の名前は鳥遊唯望^{たかなしゆみ}。十八歳。得意なことはパソコン。よろくね！」

「え、ああ……って十八歳!？」

ギョツとし、一は彼女を見る。どうみても、十八歳……自分より年上に見えない。小学生六年生ぐらいにしか……。

苦笑いしながら、どうしていいものが困つてると、また入ってきた。

「あら、新入りってあなただったんですか？そういうことですか。どうぞ、よろしく願います」

またもや一はギョツとした。今入ってきたのは、さっきに散々なことをいっていた沖ノ鳥雪だった。さっきからは想像もつかないほどの丁寧ぶり。どうしたというのだろう。

「ああ、こいつエセ多重人格なんだ。気にしないでやってくれ」

「エセは余計ですよ玲渚さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はじめは、今日はじめて多重人格を見た。ここまで変わるものなんだなあと、勝手に感心する。

それからまた二人入ってきた。一人は桜島烈さくらじま くれつという名前で一同い年だった。本人いわく、「反抗の意志」で使う武器は、全部彼が改造を施しているらしい。二人目は佐渡島樹椰さどし ま みきやという一より二つ上の男だった。反抗の意志のサブリーダーだそうだ。

「こいつらと、あと今はベッドで寝ているが、夕波ゆうな？織おりが、メンバーだ。ほら、お前も自己紹介しろよ」

玲渚にいわれて、初めて自己紹介してないことに気付く。一は、メンバーを見回した。なんだかみんな個性的でおもしろそうな奴ばかりだった。？織は今いないけど、あとでお見舞いでもしてそのとき自己紹介してもらおう。

一は、メンバーのほうへ向き、なるべく大きな声で言った。

「はじめまして。浅上あさかみといいます。よろしく！」

第二話？

第二話

「それで、？織^いさんは大丈夫なんですか？」

一は、豚肉の入ったパッケージを手にとりながら、玲渚に訊いた。自己紹介が終わってから一は、玲渚^{れお}がかい出しに行くというので、付き合っていた。向かったのは近くの、安売りスーパー。

自動調理器がだいぶ普及した今の時代でも、やはり手料理の人氣は根強い。だからこういう食品を売るスーパーは時代の変化とともにつぶれないですんだ。でも、やはり都会のほうは自動調理器の普及率がすごいらしく、スーパーも次々につぶれているということだった。

「ああ、夕波^{ゆうなみ}は大丈夫だよ。あいつ、回復力ははんばないから」

玲渚は、鶏肉のパッケージをぽい、と様々な食品が入っている買い物かごに放り込んだ。鶏肉にしても豚肉にしても、パッケージの裏には、大量の文字や数字が羅列されたシールが張つてある。グラム数、担架、熱量等はまあ、普通として、そのほか各種栄養素が、細かく量まで表示されている。

「あ、そうだ。調味料とかもだいぶ切れてたな・・・そつちも買わなきゃな」

そつちいいながら、調味料売り場のほうへ向かった。

「でも、あの背中^{せなか}の傷・・・。あの銃痕^{じゆうこん}みたいなのなんなんですか？さっきの玲渚さんたちの話をきいてる限りでは、前からあるようですけど」

玲渚の視線が少し鋭くなった・・・ような気がした。

「ああ、あれな。ま、確かに昔からある傷だよ。・・・。・・・。・・・。反抗の意志に入る前からあるし、詳しいことは・・・。・・・。知ら

ない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明らかに何かを知っているような口調だったが、どうもいいくなさそうだったので、訊かないことにした。

「お、これこれ。醤油が切れてたんだよ」

玲渚が醤油を採っている棚の横にふと、目をやった。

「・・・・なんだこれ」

調味料の棚に変なものが置いてあった。これ、本当は違う場所においてあるだろ、というもの。

そこにあつたのは、サプリメント。昔の、健康食品という意味合いより、現在では、料理において栄養を補うものの総称として使われている。もとの意味は薄れてしまった。それにしても、醤油や塩や砂糖などと一緒に、こんなクスリじみたものがおかれるようになったのはここ二、三年の話だ。一も、あまりスーパーに行かないせいか、はじめてみた。

「そつえば、料理つてだれがするんですか？」

「料理は基本、当番制だ。一日交代です。あ、そうか。お前が入ったからメンバーはちょうど7人。割り振りがしやすくなるな・・・・」

「え、料理・・・・？俺、料理なんてできませんよ」

一は、生まれて一度も料理などしたことがなかった。家がそこそこ裕福だったせいもあり、毎食自動調理器で作られていた。

すると、玲渚はハハ、と笑った。

「大丈夫だ。夕波が教えてくれるさ。俺たちも最初は料理なんかできなかったんで、夕波に任せっぱなしだったんだ。でも、ちよつと前にな夕波が自分ばかり料理するのはおかしい、と言って毎日料理講習会みたいな小としてたんだ。そのおかげで全員一つ二つは作れるようになった」

「なるほど・・・・・・・・」

想像しただけで、なんだか楽しそうな光景が浮かぶ。本当に彼ら

が、銃火器なんかをもつて、「反抗」している集まりには思えない。「夕波も、さつき出る前に見たときは、意識が回復してたみたいだし……明日には元気になってるだろ」

「それにしても、あれだけ出血してたのに、本当に回復が早いですね。あのクスリのおかげですか？」

一は苦笑いをした。あの時、？織の背中からは、相当な量の血が流れ出ていた。あれだけの量の出血があれば、そのショックで、意識が少しの間戻らなかつたり、体が動きにくいはずだ。それにもかかわらず、約一時間ほどで、意識が戻ったという。単に、精神力が強いのか……それとも別の理由があるのか。

「あのクスリな。あれ、企業秘密って言ったんだが、本当のところは、俺もよく分からないんだよ」

「どういうことですか？」

「いやな、それが、あれは？織が持ってた薬なんだよ。背中が、もし、開いたらこれをかけて、てな。メンバーは一ビンずつ持ってた。お前もそのうち渡されるだろうよ。まあ、使ったのは今回が初めてなんだが……ん？」

ふと、後ろから視線を感じた。何かとおもい二人が振り向くと、小さな老婆がいた。老婆はこちらをじっと見ている。そこでやっと二人は話に集中しすぎて、道をふさいでいたことに気付く。二人はさっと、陳列棚側により、道をあける。老婆は少し怒った様子で、通り過ぎていく。一と玲渚は軽く会釈をする。

「ちよつと広いところに行くか」

「ですね。それより、買うものってこれだけでしたよね。先にレジに行きませんか？」

「そう……だな。レジに行くか」

レジはちょうど一つしかない店の入り口のところへある。玲渚と一は重い買い物がごを持って、そこへ向かう。レジ付近まで来ると、なにか、違和感を感じた。二人は、少し離れた場所に立ち止まる。

「お前もよく分かったな。”違和感”に」

「は、少し呆れ顔で首を振る。」

「よく分かったもなにも、あれはおかしすぎるでしょ」

レジのちょうど奥は、ガラス張りの窓になっている。この店は駐車場が、店の横にあるので、店の正面である、ガラスの向こうに見えるのは、ただの道路。その道路の脇、こちら側に一台の白いバンが駐車していた。フロントガラスをのぞく全ての窓はスモーク加工されて、中を窺うことはできない。後部ならともかく、前の運転席側の窓まで、スモーク加工するとは、あやしい。しかも、バンだ。

最近、バンは滅多に見なくなった。基本的に、バンの生産が中止されているからだ。現在の車の販売の中で、一番多いのがハイブリッドの軽自動車。トラックなどを除く約九十パーセントがそれだ。最近ではバンに乗るのは、よほど特殊な仕事か、それが、犯罪を犯す者が乗っているというイメージが定着してしまった。事実、イメージが定着しても、犯罪者がバンに乗るメリットとしては、容量が大きいこと。たくさんものを運べることだ。それが、犯行に使う準備のものだったり、また、強盗したものを運んだり、活用されている。もちろん、バンにはごくわずかだが普通の人も乗るので、取り締まることはできない。

「おい、降りてきたぞ」

玲渚は目を細めた。降りてきたのは、強盗というイメージを壊さないほどベタな格好をした二人組み。男女の区別はつきづらいが、体格からして、おそらく男性だろう。それにしても、ここまでイメージ通りとは、逆にレアな気がする。服装は動きやすい、格好で、顔に真っ黒な、目と口のところだけが開いた覆面を着用している。いまどき、覆面強盗など存在しない。覆面強盗は、覆面自体の処理が大変だからだ。

「あ、あいつら……」

降りてきた二人は、それぞれが、拳銃らしきものを所持していた。客は少なく、レジには二人の女性店員しかいなかったが、その店員はまだ、強盗犯には気付いていない。

「おい、危ない！！後ろ！」

玲渚が叫ぶ。レジの店員はいきなり叫んだ玲渚のを見て一瞬驚きもしたが、玲渚の視線の先を見て、そちらを見た。しかし、遅かった。

店員は二人、そのうち一人に拳銃が突きつけられる。二人とも、悲鳴をあげようとしたが、強盗犯のひと睨みで、制された。

「ほら、分かっていると思うが、売上カードをよこしな。それと、パスワードも教えろ。おっと、非常ボタンなんか押そうとするなよ、そんなことしたらどうなるか分かってんだろうな？」

売上カードとは、その店の売上を記録したカード端末のこと。その売上カードは、売上分の額のお金に等しく、店員の給料等も、そこから差し引きで渡される。この強盗犯は、おそらくカードから自分の電子ウォレット端末に電子マネーを移動させるにちがいない。

一と玲渚は、陳列台の陰から様子を窺っていた。

「（一、携帯で警察を呼んでくれ。強盗の場合は110510PO Sだ、打ち込んで、一度コールするだけでいい）」

一は頷き、指示どおりに携帯で警察に電話をかける。通話ボタンを押した瞬間、強盗犯のいるほうから、ビービーという警告音が鳴り響いた。

「誰だ！！警察に電話をかけたのは！！」

強盗犯の怒号が響く。

どうやら、検知装置を作動させていたらしい。

「うわ・・・・・・・・どうしよう玲渚さ・・・・・・・・ちょ、どこ行くんですか！」

玲渚はすたすたと、強盗犯のほうへ進み出ていた。

「はい僕です。電話かけたの」

しかも、なぜか友達と話すようになれなれしい言葉。

「貴様・・・・・・・・なめんてんのか？そんなことして、どうなるか・・・・・・・・わかってんだろうなああっ！！」

強盗犯の一人が、玲渚に向けて引き金をひいた。爆音とともに、

銃弾が射出される。玲渚は、じっと動かない。

「玲渚さん!!」

次の瞬間、玲渚はさっと、体をずらした。弾は、玲渚の横、ギリを通り過ぎ、後ろの陳列棚に当たった。

「くっそ……貴様……」

強盗犯は玲渚をにらみつける。玲渚はどうってこともないように、笑い飛ばしていた。

「あはは、こんなに距離があればだって避けれますよ」

こんなに距離がある、といっても三メートルほどしかない。驚異的に反射神経、動体視力といえる。

「さあて、『反抗』といきますか?」

玲渚はバッと前へ飛んだ。強盗犯は、虚を突かれ、一瞬反応に遅れた。その間に、玲渚の鋭いフックが炸裂する。その強盗犯は、よるめいた。その隙を狙い、玲渚は今度は相手の頭を押え、その頭をおもいつきり、自分の膝に打ちつける。それで、気絶した。おそらく、軽い脳震盪を起こしたのだろう。

もう一人は、一連の様子を、啞然としてみていたが、仲間が気絶し、倒れたという事実を把握し、ようやく我に返った。

「来るな!!こいつがどうなってもいいのか!!」

言ったらいけないが非常にベタな展開だな、と玲渚は思った。もう一人の強盗犯は、店員を乱暴に引き寄せると、その店員のこめかみに銃を当て、盾とした。

「まったく……だめだな」

玲渚はそう呟くと、人間とは思えないスピードで、犯人に迫った。そして、足を振り上げ、正確に銃だけに当てる。銃は中を舞い、かたりと床に落ちた。強盗犯は、それで少しひるんだが取り乱すことはなかった。彼は、店員を乱暴に投げ捨てる。

「きゃっ!」

彼の力は意外にすごく、女性の店員は相当投げ飛ばされた。飛ばされた咆哮には壁があったが、一が何とか、飛び出て、店員をキヤ

ツチしたので衝突はしなかった。

強盗犯は、玲渚に襲い掛かった。よほど腕に自信があるのだろうか。真正面から迫る。まず一発鋭いハイキックが飛ぶが、玲渚はそれをかがんで、間一髪で避ける。玲渚はしゃがんだまま、相手の懐に入り、ストレートパンチをあいての腹めがけて打ち出した。しかし、予想と反し、手ごたえが堅すぎる……。

「まさか……」

玲渚が気づくと同時に、強盗犯はにやりと笑った。

「そうだよ、高性能の防弾チョッキだよ！」

強盗犯は、膝を思いつきり打ち上げ、玲渚の腹へ直撃させる。

「ぐはっ……」

「玲渚さん！」

玲渚がよろめいている隙に、強盗犯は床に転がっていた銃を拾い上げた。

「ハハハ、かつこつけようとしたってな。結局はバッドエンドなんだよ！」

引き金をひこうとした時、外からサイレンが響いてきた。パトカーのサイレンだ。

「ちっ。もう来やがったか」

一瞬、強盗犯の注意が、パトカーのほうへ向けられた。玲渚はその隙を逃さず、体制を整えなおし、強盗犯の首を片手で掴んだ。

「知ってるか？強盗犯にハッピーエンドは、物語じゃ許されないんだぜ？」

「なにっ!？」

引き金をひこうとするが、もう片方の手で、拳銃を持った手が拘束されて、動かせなかった。

「うおおおおお！」

玲渚は、首を掴んだまま、恐るべき怪力で、強盗犯を投げ飛ばした。強盗犯はそのまま、ガラスを突き破り、歩道へと飛び出し、気絶した。ちょうどその時、パトカーが到着した。

それにしても、片手で投げ飛ばすとは……常識はずれしている。

到着した警察官は、咄然としていた。それもそうだろう。

強盗が襲ってきたから、と急いで駆けつけてみれば、強盗は全員のびている。

警察官の一人が、玲渚にたずねた。

「えーと……。これはあなたが？」

玲渚は笑みとともに答えた。

「はい、そうです。いやあ、小さい頃から武術をいろいろと習ってまして……ハハハ。役に立ちましたよ」

警察官は、目を白黒させて、はあ……。と小さな声で言った。

「もしよかつたら、こちらへお名前を打ち込んでもらえませんか？報道等で名前が出ますよ？」

警察官はそういつて、ポケットから小さな端末を取り出したが、玲渚は手を振って、それを断った。

「いえいえ、べつにそんなのどうでもいいことですよ。僕はただ、少し上を向いた。

顔を戻し、にこつと笑った。

「人間が大嫌いで大好きな人ですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9809s/>

The Number Of Angel

2011年5月11日22時05分発行